

Platform

あの山の向こうへ

ここは仮想世界の
登山口

station

- VRChat : VR Trail
- cluster : ためいき山
- Resonite : ちよつばや 冬のキャンプ場
- Real.W : ミリオンペタルハイクパーク

Platform Vol.15 contents

Gravure:somewhere	4
Yamaha Motor - VR TRAIL VRChat	12
ためいき山 cluster	18
ちよっぱやワールド 冬のキャンプ場 NeosVR	24
ミリオンペタル バイクパーク Real.W	30
あとがき	36

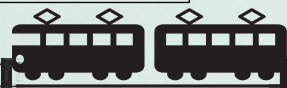
第15号のテーマは「山」。

雄大で人間という種族の小ささと自然の偉大さを思い起こさせる存在が山だと思っています。そんな自然の権化のような山が、仮想世界に来たらどうなるでしょうか？あるいは、仮想世界の存在が現実の山の中に入ってしまったら？

今号では、フォトグラメトリの技術を活用して、現実と仮想の垣根を揺らがせるようにしてみました。仮想・現実・自然・人間。これらの対比の中から、あなたには何が見えて来るのでしょうか？

編集長

◀ To the next PLATFORM.



世界には、色んな町がある。
その町ひとつひとつに、駅がある。

どの町も駅もそれぞれ違っていて、
違った人たちがいて、
そこを訪れた僕たちが抱く思いも、
きっと違うのだろう。

……VRでも、Real Worldでも。

今はまだ離れ離れの「駅」を、「町」を、
あなたへ繋ぐ線路でありたい。

——それが「Platform」



Go to Top of the World.



Nearest
Place to
Heaven
that
I've seen.



あの山の向こうに、何が待っているだろう。



Author: mo_末

World: somewhere

今回やってきたのは「Yamaha Motor - VR TRAIL」というワールド。こちらはなんと！あのYAMAHAが直々に制作したワールドだ。YAMAHAというと、音楽畑で育った私としてはまずピアノなのだが、バイク好きの人からすればバイクだろうし、他にも多種多様なジャンルで製品を世に送り出し続けている大企業である。そんな企業が今度はなに

「コーヒーの銘柄に詳しくないけど、本当にコーヒーは好きなんだ」みたいな「好き」。それが私にとっての自転車だったりする。

しかしまあ、これまで自転車に乗ってきたのは当然平地で、せいぜいちよつとした坂がある場所を走破するぐらいだったが、今回の私は一味違う。バーチャルな世界とは言え、険しい山を攻略しようというのだから。

VR CHAT

風を感じて山を駆けよう。

VR TRAIL



Million Petal
BIKE PARK
MORI-MACHI

私

は実は自転車が好きだ。といっても、自転車のレースをみたり、自転車の賭博をやったり、高価な自転車を買ったり1日100kmも走ったりするわけではない。普通のクロスバイクで、普通に2時間ぐらいサイクリングする、みたいなレベルだ。そう言えば昔、『東京自転車少女』という東京都練馬区のみを舞台にした、すごいローカルな漫画があった。主人公が練馬区の高校に通っているから練馬区内をポタリング（目的地を特に定めることなく自転車で散歩するようにゆったり走ること）するという漫画だったけど、「え、ローカルな話でここまで漫画かけるんだ」と思って全巻揃えた。せいぜい自分がやるのもポタリングという感じ。全然やり込んではいないから、ガチで自転車をやっている人の前では「好き」といにくいレベル。『ハンチョウ』の



コースがある森町の御当地マップなど街興しも意識されている。
また実在の一本杉をモチーフにした展望台など意外に見所が多い。

ずっと自転車を見ていても仕方ないので、実際にコースを走ってみることにする。なんと10か所以上もマップが用意されているのだが、とりあえずは初心者コースから。どうやらコントローラーでハンドルを切り、ブレーキをかけて、くねくね曲がった山道のコースを下るらしい。道中にはポイントが貰える大きな栗が置いてあるから、それを回収しつつタイムアタックを行うと。よし、とりあえずやってみよう。スタートするとゆっくりと自転車が動き始める。ハンドルを動かすと、自分が想定したよりも思いつきり動く感じがする。これ、わりと繊細な操作を要求されるなあ。一つ目の栗を回収し、ブレーキをかけ、曲がる。よしよし……コースアウトせずに最初のカーブを曲がれた。そのままそのまま……。

ほうほう、なるほど。こんな風に作られているのか。あ、このチェーンの場所、こないだ自分の自転車でぶっ壊したところだな。あー、ちょうど負荷がかかる部分なのかな……などとまじまじと見てしまった。



コースへは中央の地図から移動できる他、手元に呼び出せるタブレットからでもテレポートできかなり高機能。チュートリアルも充実している。

コースを走れる高性能電動MTB MT-PROが展示されている。
精緻なディテールやリアルなアニメーション動作はまさにメーカーならでは。



を？と思ったが、今回はどうやらマウンテンバイクらしい。マウンテンバイクまで製造販売しているのかと驚きつつ、とりあえずワールドに入る。どうやら説明文によれば「静岡県周知郡森町のミリオンペタルバイクパークを再現したMTBのVRコース」とのこと。要するに静岡でマウンテンバイクを走らせることができる場所を再現したので、ウチのマウンテンバイクで走ってみようぜというワールドだ。

ワールドに入ると、いきなりコースがあるのかと思いきや、マップの説明や製品の紹介、元となったMBTコースのある御当地の紹介動画が置かれていた。受付やカフェまである。良く見るとこのワールドの作り込みはすごいな！木や道路がキチンと再現されている。光の当たり具合もちょうど良く、大体5月くらいの気温さえ感じられるほど。そんなエントランスで一番目を引いたのは、マウンテンバイクのモデルだった。ボタンを押すと展示されている自転車のペダルが回り、チェーンが動くようになっていた。



コンテナを改装したくつろぎのカフェ。チェアや焚き火台などもあり、現実側から少しアレンジして心地よく滞在できる。





今号では、元となったMTBコース「ミリオンペダルバイクパーク」も取材している。ぜひ写真を見比べてみて欲しい。



(文：ニッソ編集長)

ルドは作り込みときたら、まるで本当の森で森林浴をしているみたいだ。二、三回、深呼吸をする。酔いが収まるまではもう少しかりそうだから、もう少しこうしていよう。このワールドでの山下りと、その後の休憩時間。これは、新たに発見した、自転車をする時の「好き」かもしれないな。そう思って、もう少しだけ休憩を続ける。ああ、ここはいい天気だ。

あー！と思った瞬間、加速する。斜面の角度が急になっている。慌ててハンドルを切ると、思ったより動く！そうだ、これは繊細な操作が要求されるんだ！ブレーキをグッとかけると完全に停止。体制を立て直してから、続きを下る。栗を拾う、ブレーキをかける、曲がる。栗を拾う、加速する、ブレーキをかける、栗を拾う、曲がる。加速する。加速する。加速する。曲がる。曲がりすぎる。焦る。加速する。加速する。焦る。焦る。コースアウトする。もういいや突っ切っちゃおうと思う。加速する。加速する。加速する加速する加速する……。

ようやくゴールすると、どっと疲れがきた。いやー、これ意外とキツいなあ。初心者向けとはいえ、結構曲がりくねっているし、デコボコしているからガクンガクンとして少しVR酔いしてしまったようだ。休憩をしようと思ってゴール地点で立ち止まっていると、木々の合間から射し込む日差しに気が付く。このワ



ためいき山

cluster

「はあ……」っと重い息を
吐き出すような、静かな山の夜。
展望台から眺める山の風景が
ためいきのように夜空へと
広がっていく。

山の自然に 触れて

「山」、みんなは山と言われて何を思うかな？私は山といえば自然、とりわけ自然と一緒に過ごすキャンプを想像するかな。私が生まれ育った場所には、いわゆる山と言われる場所は近くになかったから、キャンプとか特別な時に訪れる、ちよっと特別な場所って印象だよ。

みんなが生まれ育った場所の周りには山があったかな？それとも海があったかな？それともコンクリートで出来たジャングルで育ったのかな？どれが良いってことはないけど、それぞれ育ってきた環境で同じ言葉、同じ場所でも違った感じ方をするんだと思うの。

でもどんな形であれ、それぞれが感じる世界はとても素敵な感じ方であると思うし、そうであればいいなって私は思っ

ているよ。

と、そんなことを思い出させてくれた今日のテーマ「山」だけど、いま私はclusterにある「ためいき山」というワールドに來ているよ。「ためいき山」のため息の意味はね、作者さんがワールドの概要欄に書き残してくれているよ。「ため息が出るような夜。広くて静かな山の中で、ひっそりと過ごしたいときもある。ためいき山はそんなあなたをやさしく守ってくれます。」

ため息が出るような壮大な景色の中で、まったりと流れていく景色を眺めながら文章を綴る私。この大自然の山の中で自然を感じながら頭に浮かぶ思いを文章に変えながら、一言一言書き残していく、静かなこの世界と共に。

少しだけこのワールド（世界）を紹介しようかな。このワールドに降り立つと、そこは山の中腹。目の前には山の頂上に向けて伸びる階段の道が伸びているよ。

その階段を登る前に少し周りを見渡すと、そこには山のふもとへ繋がる道。さて、どちらに進もうかと迷うけれど、せっかく山に來たのなら山の頂上からの景色を見たいよね。と、頂上めがけて階段を登っていくことにする。

山を登る階段を登りながら時々後ろを振り返ると、少しずつ見えてくる山の全体が、この世界の自然を静かに教えてくれているような、そんな気がするね。階段を登り終えて見えてくるのは少し広かった広場。その広場には、さらに高いところに登れる展望台がそびえ立っているのが見えてくるよ。

でもそれだけじゃなくて、小さな休憩場所に祠のような場所もあるね。山や川や湖とかの大自然が広がる場所って、昔からこういった神社とか祠とか、お寺とかお地藏さんとかがあって。ここに何か居るんじゃないか、あるんじゃないかって、確実に何かあるってわけじゃないのに、何か掴むことのできない何かがあるような、そんな気持ちになるよね。

大きな広場と展望台、

絶景の穴場

階段を登りきると、広場には高台に立つ展望台がある。ほかに小さな休憩スペースや祠（ほくら）など、ちょっとしたパワースポットも点在しており、静かに楽しめる場所となっている。



山の展望台の上から見ると沓巻。川の方までくっきりと見える。

展望台を登ると、そこは山の中で一番高い場所。山も山のおもむきに流れる川も見下ろすことができる景色がとても綺麗な場所になっているよ。この世界が夜なのもあって、ところどころに見えるライトの光や綺麗な星の光がとっても綺麗に見える幻想的な場所だね。

この場所には座敷が敷かれていて、今日の私は一人で来ているけど、フレンドさんを連れて一緒に景色や星空を見上げながら雑談にふけるっていう過ごし方も良いんじゃないかな。いつもとはちょっと違った世界の中で過ごす非日常な体験が出来ると思うの。

そうそう、この展望台も良いんだけど、先ほどの祠の隣から続いている小道を進

んだ先もおすすめのスポットになっているよ。少し山から突き出た形の空間は、山の頂上とはまた違い山と麓に流れる川が一体となっていて、自然を感じる事ができる絶好の絶景スポットになっていると思うの。いっしょに置かれているコーヒーを片手に、この自然を心行くまで堪能してみるのはいかが？

それから、場所は変わって山の麓にやってきましたよ。移動はメタバースらしく、先ほどの絶景スポットから頂上の方に戻る途中にある写真からレポートする事ができるよ。自然の中を歩いて移動するのもとてもいいけれど、こうやってぱっと移動できるのもメタバースのいいところだよ。

だから何かってわけではないけれど、それでもこういうのを見ると自然と手を合わせて、どうかここを訪れるみんなが、ここから見下ろせる世界のみなが、幸せで居られるようにと。見守ってくださいと思うってしまうのは人の性なのかな？

広く清らかな川で アウトドア

山の麓には大きな川が流れており、そこで釣りやキャンプなどのアウトドアを楽しむ人の姿も見られる。



山の河川敷にキャンプ場があり、食事ができるスペースも完備。

そんな山の麓には大きな川が流れているよ。大きな川といってもキャンプ場がありそうな、深くないところもある感じの穏やかさもありつつ、でもちゃんと水の迫力も感じられるあの感じ。きつとりアルだったら川の河川敷でキャンプを楽しんでる人がたくさん居るんだろうな。って思うくらいにはいい雰囲気のところだよ。ちょうどキャンプ場らしく川岸に車が置いてあって、きつとキャンプで遊びに来た誰かの車なのかもしれないね！なんてねっ♪

後ろを振り返れば、そこには先ほどまで居た山の高台が遠い空の上に見えてくるよ。山って登るのも素敵だけど、こうやって麓から眺めるのもまた一興だよ。とても大きなその体は、何もかも飲み込んでしまうような雰囲気もありつつ、誰をも守ってくれるような安心感もある。そんな不思議な世界を感じさせてくれるよ。

という感じで今日は「山」というテーマでいろいろなワールドを巡り歩いて見つけた、大きな山とその麓に流れる川、そして夜空いっぱい広がる星々に包まれながら自然の壮大さを改めて感じさせてくれるような、そんな旅路だったかな。日ごろの忙しさに忙殺されて、ついつい忘れてしまいくらいになる心の豊かさを、自然が私に与えてくれる。この世界を回りながら、そんな何かを感じ取ることが

ためいき山

by しかくいすいか

Clusterには珍しい、広大な山の風景を堪能できるワールド。長く続く階段や展望台、キャンプ場などがある。

 **ACCESS**

できたことに感謝しながら。今日はここらへんでお暇させてもらおうと思うよ。
みんなの毎日に、私の毎日に、自然の恵みが在りますように。
(文…ことはしろ)

ちよっぱや
ワールド
冬のキャンプ場

Resoniteといえば、その場でアイテムを
取り出したり、ワールドを作成できる。
VRでキャンプを楽しんだ気分になれる。

今回著者が紹介するのは『ちよっぱや
ワールド冬のキャンプ場』だ。恐らく本
誌が掲載されるのは夏真っ只中であるた
め、「ちよっぱや」どころか北半球から
南半球への旅行もかくやの時期外れだが。

本ワールドはオレンジ氏が主催する
「ワールド制作イベント…ちよっぱやワ
ールド」で作成された。ワールド内に大
人数のユーザーがログインした状態で、
様々な3Dモデルやギミックなどを設置
する、クリエイティブに特化したResonite
ならではのイベントだ。過去にはお題と
してツリーハウスの回やハロウィンの回
などがあったが、今回は「冬のキャン
プ場」を取り上げるというわけだ。

さて、本号のテーマは「山」であるが、
本ワールドは冬山に設置されたキャンプ
場とも解釈できる。上空には降り注ぐ無
数の流星やオーロラ。雪景色に求める定
番で満ち溢れた世界。しかし、ワールド
に降り立って目を引くのは、周囲の小高
い丘に設置されている気象レーダーらし
き物体である。実物はより大きい、もし
くはより小さいのかもしれないが、とに
かく間近で見上げるとその巨大さに圧倒
される。

例えば高速バスの窓席から外を眺めた
時、山の頂上にある気象レーダーを遠目
に見たことは何度もあるが……「あそこ
に何があるのだろうか?」と思いつつ、何
度も見たことあるようで、しっかりと見
たことがないものをよく確認できるのは、
メタバースならではの魅力だ。

Vol.12（テーマは車・車両）で著者が取
材した際の『阿讃サーキット』もそうだ
が、Resoniteは特にこうした熟視（時に
窃視）的な経験をすることが多い。

好奇心は違和感から

好奇心、
無限大。

ちよっぱや
ワールド
冬のキャンプ場

CHOPPAYA
WORLD
WINTER CAMPSITES

写真/Tokikaze

『シーズン2』にあるものと同一である。

しかしこれだけ混沌とした山の中でも、特に好奇心をくすぐられるのは、「この先危険につき関係者以外立入禁止」と書かれた看板が、入口に設置されたトンネルに違いない。それこそ先ほどの気象レーダーが設置されている場所なんかは、現実世界では関係者でもない限り立入禁止だから、間近でレーダーを見上げることもできる人はごく少数だろう。しかしここはメタバース、命の危険や法を犯す心配はない。背徳感に思わずニヤリとしながら、トンネルを進む。

はてさて、二又に別れた道の右の方を進むと、工事現場でお馴染みのプレハブがある。なるほど、たしかに関係者以外立入禁止だ。著者の子どもじみた期待に対する、一番現実的な回答である。ひとしきり周囲を見回し踵を返すと、なんとトンネルの出入口の隣に宝箱エリアが！駆け寄って開いてみると、なんかすごい武器だった。著者は単純な性格であるため、こういう珍しいものが見つかったら、なんとなく嬉しくなってしまう。



山の上には大きな気象レーダーが並んでいる。光に照らされたアンテナを見るとなかなかの圧巻である。

夜空に映える

冬のキャンプ場

過去回とえば、本ワールドはVol.3（テーマは「混沌」）でも取り上げることができたかもしれない。雪山に閉ざされた場所でありながら、キャンプテントはまだしも、ライブスタジオが設置されていたり、クリスマスの晩餐会のように豪華な食事が置かれるテーブルがあったり。更には三角コーンで『境界』を示した神社の他、ある日突然地下から湧き上がったかのようにポツリと温泉まである。場違いにもオリジナルのスノーボードが作れるギミックがあるが、これは恐らくVol.4で著者が取り上げた『Snow board

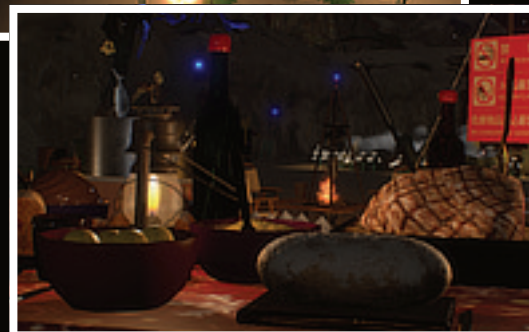
CHOPPAYA WORLD
WINTER CAMPSITES



ぼくらが作った

最高のキャンプ場

このワールドは『なんでもあり』。
温泉やライブスタジオ、豪華な食事
などがあったり。VRならではの可
能性で面白さを引き立てるのだ。



さて、もう一方は暗闇に遮られて先が見えずーたしかワールドのタグにホラーの文字はないので、一応大丈夫だとは思いますがー息を吞んでから暗闇を駆け抜ける。案の定というべきか、備えていて正解だった。円形の広場の中央で、両目が悍ましく赤光りする骸の竜。無機質に佇む複数の仏像が、壁の向こうからこちらを見下ろす。西洋の暴力的な威圧と、東洋の陰湿な不気味さの併せ技。

もしかと思って、さっきの宝箱に保管されていた武器を持ってくる。骸竜の体内で心臓のように鼓動する、星型の物体に対して、それを突き刺す。……何も起こらない。著者のやり方が悪かったのだろうか？ まあでも、好奇心を満たせたから良かった。『立入禁止』に侵入したという行為そのものに価値があるのだ。

思えば好奇心がくすぐられるのは、『違和感』を覚えた瞬間が多いかもしれない山の頂上にある気象レーダーや、不自然に設置された人工物、それから立入禁止の看板。山はその大きさ、存在感からして人里においても認知しやすく、故に自然の中では違和感を感じやすい。好奇心

のまま危険地帯に足を踏み入れたら最悪命を落としてしまうかもしれないが、禁忌を突き進む解放感と、何らかの達成感を感じたいならば、安全安心、気軽に実行できるメタバースでは非実行して欲しい。

(文…sun)

この先
危険地帯!?

このワールドにはトンネルがあり、
中に入ると宝箱が！しかし、魔物も
潜んでいるとか……？

CHOPPAYA
WORLD
WINTER CAMPSITES

恵みの源を走る。

か つて山は恵みの源だった。燃料となる薪炭を始め、木材や漆、薬草…山の様々な恵みは入会という概念のもと地域の共有財産となり、何百年もの間、人々の生活を支えてきた。その恩恵は山から遠くの都市にまで建材という形で及び、今も各地に残る「木場」という地名がそれを伝えている。

しかし特に戦後、人々の生活は山との関わりを失いつつある。化石燃料への転換や、都市部への人口集中。各種構造物の鉄・コンクリート・プラスチックへの移り変わり。材木も安価な輸入材が殆どとなった。山の香りは日々の生活から失われ、それとともに里山はもはや富を産まなくなり、人々から忘れ去られた場所となりつつある。

かつて遠江と呼ばれた静岡県西部を北上すると、南アルプスの山々に行き当たる。その麓に位置するのが森町で、その名の通り7割以上が森林に覆われた山と森の街である。新幹線の停まる掛川駅より天竜浜名湖鉄道で25分の

森町役場から、さらに北へ車で40分近く。都会っ子にはちょっとした秘境に『ミリオンペタルバイクパーク』はある。森町の山林を切り開いて作られたマウンテンバイク（MTB）の専用コースにして、本誌で先に紹介した『VR Trail』のオリジナル。森町に工場を持つヤマハ発動機とも深い関係を持ち、それが『VR Trail』につながった。ミリオンペタルの名はコース内に咲く桜の無数の花弁と、地主である甚沢万之助氏にちなんでいるという。

先方のご厚意でオープンより一足先に現地を訪れる。駐車場で車を降りて、不思議な気分になった。初めて来たのに、そこが見覚えのある空間だったからだ。というのもこここの地形をスキップして作られた『VR Trail』という、まさに電子の双子の片割れというべき空間を、筆者は既に何度か訪れていた。けれど場内を少し歩くと、やはり仮想世界も現実という世界の解像度には叶わないと見惚れてしまう。雨風に打たれた看板の色合い。人の手で掘られ固

Million Petal
BIKE PARK
MORI-MACHI

Million Petal Bike Park MORI-MACHI



Million Petal Bike Park MORI-MACHI



Real World

写真／思惟かね



められたコースの起伏と土の彩。森に分け入る軽トラの土と汗にまみれた佇まい。早朝のしんと冷えた香^{かぐわ}しい山間の空気に、木を削る工具の音が響く。仮想空間とのコントラストゆえだろうか、自然の中に人の手で作られた空間のリアリティが、より一層感じられる。

やがて開場時刻となり、続々と自転車
を積んだ車がやってくるが、思ったより
子供や若者が多いのに驚く。慣れた手つ
きで愛車を下ろすベテランに混じって、
レンタルした自転車を恐る恐る駐車場で
練習する若者や、早く行こうよと母親を
急かす子供も多い。

一足先にコースで待ち構えていると、
やがてMTBに乗ったライダーが駐車場
から登ってくる。そして登っていく……
と思えば、不意にそれがすごい勢いでコ
ースを下ってくるのだ。ダウンヒルとい
う遊び方で、ペダルを漕ぐことなく重力
を背に受けてコースを右へ左へ走り抜ける。熟練者がバンクを使ってコーナーでスパッと向きを変えるのは魔法のように、テールブトップで自転車を舞う様には思わずため息が出る。よくよく見ればそれがまだ小学生くらいの子供だったりして驚く。なるほど、これは楽しそうだ。リアリティというスパイスは、きっと仮想空間の『VR Trail』で感じた楽しさを何倍にしてくれるのだろう。

私たちの暮らしが山の恵みを必要としなくなったこの何十年、様々な歪みが生まれている。手入れされず荒廃した山林は豪雨災害を助長し、伐期を迎えても利用されない杉の人工林は花粉症の原因となっている。長年人と共にあったがゆえ、実は山もまた人との関わりを必要としている。たしかに現代の私たちの日々の暮らしを、再び山の恵みのもとに成り立たせることはもはや難しい。けれど、新たな山との関係性を探ることもまた今だからできる。近年にわかに人気な登山やキャンプ。森林や山岳の様々な自然・文化的遺産に親しむツーリズム。ミリオンペタルのような山を駆け巡るMTB。あるいは今、仮想世界の中で「山」という世界に触れようとしているあなたも。物理的な距離を超えて多くの人が、日常ではなく非日常の場として、山がもたらす恵みに親しんでいけば、人と山とはこれからも良い関係でいられるだろう。

山の恩恵を全身に浴びて走る若いライダーたちを見やりつつ、森の空気を胸いっぱい吸い込む。きらきら光る木漏れ日の中、私は山を下り、街へと帰っていった。

(文：思惟かね)

ミリオンペタル バイクパーク



アクセス

〒437-0208
静岡県周智郡森町三倉2167-1



- ◎新東名森掛川インターより30分
- ◎新東名遠州森スマートインターより25分
- ◎国道1号線 大池インターより50分

※県道63号線もしくは県道399号線よりお越しください

営業情報

営業日：毎週 土曜・日曜
9:00から16:00

定休日：平日・雨天等の悪天候日
(祝・長期連休、臨時休業などはHPでお知らせ)

WEBページ



公式HP



Facebook



Instagram

さて、先にこのミリオンペタルを「山を切り開いて作られた」と言ったが、これは訂正した方がよさそうだ。じっくり見るとMTBが駆け抜けていくどのコースも、元あった木々や地形など、自然を大切にして作られているのが分かる。山や森を取り除いて作ったのではなく、ここは山の中に、山を活かして作られている。そこで遊ぶ人たちも、ただ自分の汗だけを流して坂を登り、重力の恩恵を受け、山の斜面に抱かれてダウンヒルを楽しんでいる。老いも若きも関係なく、ただ楽しそうに。なるほど、つまり彼らもまたこの現代にあって、部分的ながらも山とともに生き、山の恵みを受けている人たちなのだ。



To the next Mountain.

station

Gravure : somewhere

撮影 : rocksuch

VR CHAT

Yamaha Motor
- VR TRAIL

執筆 : ニッソちゃん

撮影 : 一兎

cluster

ためいき山

執筆 : ことはしろ

撮影 : rocksuch

ちよっぱやワールド
冬のキャンプ場

執筆 : sun

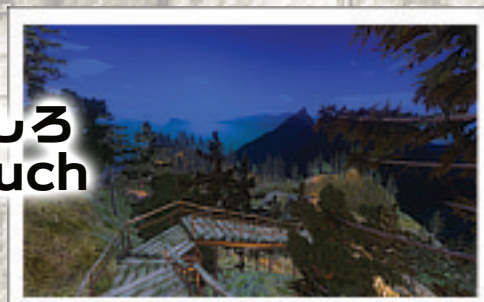
撮影 : Tokikaze

ミリオンペダル
バイクパーク

執筆&撮影 : 思惟かね

感想などは
#Platform通信欄

へぜひお寄せください!



Vol.15
Platform あとがき



ニッソちゃん

編集長



今回を見た後はリアルとバーチャルの垣根がなくなり、今私たちがどこにいるのかも分からなくなりそう。そんな時にはその場所特有の匂いがあればわかるかも。例えば、海の匂いとか。次号のテーマは「海」。お手持ちの切符をなくさないように。



SUN

ライター



私の生まれ故郷は港町だったため、もしかしたら人並み以上に山を『異界』と認識しているのかもしれない。故にVRゴーグルで巨大な山を見上げると、たとえメタバースでも非日常的な感覚に陥るのです。



わく

ライター



私の生まれ故郷の県は500m以上の山がない平地すぎる県だったので、逆に子供の頃から山が舞台の怪談や昔話が好きでした。山は非日常という感覚なので、今でも訪れるとワクワクします。



Tokikaze

カメラマン



今回のテーマでは話にあがりませんでした。山と言えば峠道。あの蛇のように曲がりくねったコーナーにどうして人は魅了されるのでしょうか… (おそらく特定の人だけ)



rocksuch

カメラマン



今回、初めてclusterに行ってみました。広場のような場所にけっこう人がいて、あちこちで話しているのを眺めていました。



思惟かね

編集/デザイン

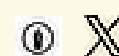


山のしんとしたあの空気が好きです。バイクで峠道を駆け上るのが好きです。そして展望台から見下ろす景色が好きです。そんな山の魅力が誌面にも宿っていますように。



燕谷古雅

編集/デザイン



「山はやまやまだけど、川は変わったなあ」小学生の頃、そういうダジャレが記憶に残っている。



ことはしろ

ライター



私が生まれ育った場所は山と言える場所が無かったので、キャンプで山に行くのは新鮮だった思い出がありまっす。改めて思い出してみると、メタバースの世界は山や川といった自然豊かな場所が多い気がしますね!



一兎

カメラマン



撮影時にいろんなコースをめぐっていたら調子に乗りすぎて久々にVR酔いをしました。ねこちゃんの自転車が思ったよりかわいかった: D



Nag

校正



海育ちは海に隠し物をしないし山育ちは山に隠し物をしない、との俗説がありますが、河口部(関上)育ちの民として、確かに山のざわめきや独特のリズムはわからんなあと思いつつあれこれ巡っています。

STAFF

編集長 | Editor Chief
ニッソちゃん

誌面デザイン | Design
思惟かね
燕谷古雅

校正 | Proofreading
Nag

執筆 | Writer
ニッソちゃん
ことはしろ
sun
思惟かね

撮影 | Photographer
rocksuch
一兎
Tokikaze
思惟かね
わく(裏表紙)

Platform Vol.15 【あの山の向こうへ】

発行: Platform編集部 (platformvirtualreal@gmail.com)

初版 (2025/7/6)

To the next JOURNEY.

2025. 7. 6

Our Journey Continues...

Platform

あの山の
Vol.15 向こうへ